238ページ29行目から240ページ14行目まで

この章のテーマ：「空性」について学ぶ

参考文献
＊１『ダライ・ラマ　般若心経入門』ダライ・ラマ14世テンジン・ギャツォ著、宮坂宥洪訳／春秋社

法我を否定する

今や、法我を否定するには〔所取と能取、すなわち知られるものと知るものについて〕二つ、
１）外の所取の境が成立していないと説くことと、
２）内の能取の心が成立していないと説くことです。

「法我」について

本書　p.237-10より引用
そのように、〔知られるもの・知るものである〕所取・能取の二つを事物だと執らえてから思い込むのを、「法我」というのです。

＊１　p129-１より引用
　宗義書に述べられている無我には、大きく分けて二つの種類、つまり「人の無我」（人無我）と「現象の無我」（法無我）がある。この場合の「人」とは、自己に対する私たちの強烈な感覚、つまり「私」のことをさしている。またこの場合の「現象」とは、主に人の精神的・物質的集まり（蘊）のことをさしているが、それ以外の現象をも広く含んだ概念である。

外の所取の境が成立していないこと

そのうち、第一を説明するなら、或る者〔・小乗の実有論者〕は、〔知られるもの・〕所取の対境は事物として成立していると主張します。

　それもまた、毘婆沙師〔・説一切有部〕は、「〔究極的原子である〕極微（ごくみ）の〔自〕体は、分無き固体が実物として有る。それらが集積したのが、色（しき）などのこの対境です。それもまた、それら極微（ごくみ）は微細なものとして個々に取り囲んでいて間隔を持ったものとして有る。現在、一方に現れるのは、例えば、ヤクの尾と草原の様態のようです。分離していないものは、有情の業により包摂されているのです。」と言うのです。

　経量部は、「それら極微（ごくみ）もまた、取り囲んでいて間隔が無く密着して触れることなく有る。」と言うのです。

　〔彼らは〕そのように主張するが、それは成立していないのです。その極微（ごくみ）は一として有るのか、多として有るのか。

一であるなら、その極微（ごくみ）には方向の分の区別が有るのか、無いのか。方向の分の区別が有るなら、〔空間的限定が有るから〕東西と南北と上下の分、すなわち六つの分になっているので、一だと主張することは損なわれます。方向の分の区別が無いなら、〔空間的限定がないから〕事物すべてもまた一の極微（ごくみ）〔自〕体になることが必要なのに、そのようでもないのです。現量による排除が有るのです。そのようにまた、『〔唯識〕二十論』に、「六つ〔の極微（ごくみ）〕により一の分に結合するなら、極微（ごくみ）は六つの分になる。六つが同一位置であるなら、〔塊・〕固体は極微（ごくみ）ほど〔の小ささ〕になる。」と説かれています。

多であるというなら、一が成立していないので、一が集積した多は成立すべくないことから、一が成立していないので、それが集積した多もまた成立していないのです。よって、極微（ごくみ）は実物として成立していないので、それの自性〔である〕外の対境これもまた、成立していないのです。

古代インドの四つの学派の主張の違い

＊1　p129-6より引用

先に述べた四つの学派のうち、有部（うぶ）と経量部（きょうりょうぶ）は、人の無我を瞑想することの重要性のみを説いていて、現象の無我という概念を認めていない。一方、唯識派と中観派は、人の無我と現象の無我を両方認めている。唯識派と中観派は、無我を人のみに限定して考えることは広範囲の煩悩や障礙を取り除く上で妨げになると主張している。人の空性をはっきりと理解すれば、それだけで素晴らしい成果をもたらすことができるだろう。しかし人の空性を理解しただけでは、苦しみから完全に解放されることはできないのである。

＊1　p131-8より引用

唯識派は、自我の実在性、外的なものの実在性、物質の客観的実在性を否定しているが、主観的な「体験」、すなわち「心」は実体的なリアリティを持っていると主張している。

＊1　p137-13より引用

唯識派と違って中観派では、般若経を決定的なものと捉え、「一切の事物と出来事はいかなる自性もない」という言葉を文字通りに受け取っている。

二つの中観派

・「帰謬論証派」→ゲルク派

ナーガルジュナが『中論』の中で試みたように、帰謬論法（プラサンガ）という論証方法を用いる。この論証方法は、ある問題をその対偶から見て、内在的な矛盾を立証するという手続きによって進められる。

ブッダパーリタ（仏護）→チャンドラキールティやシャーンティデーヴァなどによって継承された

最後はいつも空性の話をする

＊1　p142-6より

『中論』に対するブッダパーリタの註釈を読んではっきりわかることは、彼が自性という概念を世俗のレヴェルにおいても認めていなかったということである。
事象の始まりに関する四つの可能性、すなわち「それ自体から生まれる、他から生まれる、自と他から生まれる、自と他のいずれからも生まれない」を否定した、ナーガルジュナの『中論』の冒頭の句に対する註釈の中で、ブッダパーリタは、事象の発生プロセスについて批判的な分析を行えば、その始まり自体の存在を見いだせなくなることに注目した。しかし、事物は原因と条件の結果として始まるのであるから、私たちは世俗のレヴェルにおいては発生という概念を理解することができると、彼は明白に述べている。

ブッダパーリタ（仏護、『根本中論註』著ー『中論』の注釈書）
チャンドラキールティ（月称、『入中論』著ー菩薩の修行に沿って空の思想を述べる、『プラサンナパダー（浄明句論）』著ー『中論』の注釈書）
シャーンティデーヴァ（寂天、650ー700年頃、『入菩薩行論』著）
『入菩薩行論』：700年頃にサンスクリット詩として書かれた大乗仏教の典籍
典籍：各宗派の様々な思想について書かれたもの、宗義書、チベット語で「ドゥプター」と呼ばれる

・「自立論証派」→カギュ派
三段論法を用いて命題の論理的証明を行う。
バーヴァヴィヴェーガ（清弁）→ジュニャーナガルバなどによって継承された
最後は法身の話をする

＊1　p143-3より
バーヴァヴィヴェーガは、あらゆる発生の様式は「究極的」な意味での自性を欠いているという点でブッダパーリタの意見に同意していた。しかしバーヴァヴィヴェーガは、事物が自分以外の他の要素から生まれるという発生のプロセスは「世俗的」な意味での自性をそなえていると主張した。

バーヴァヴィヴェーガ（清弁、『般若灯論』著ー『中論』の注釈書）
ジュニャーナガルバ（智蔵、『二諦分別論』著）

・野田先生による成就法復習会で配布された資料に書き留めたメモより
「いつも、最後は空性の話をするか、それとも法身の話しをするか、ここがただひとつの違い」

外境の現れの否定

けれども、現在、現前に現れているこれは、何であるのか、というなら、

これは、自己の心こそが錯乱して外側の対境として現れるこれは、自己の心においてそのように浮かんだので、現れるのです。そのようであるとなぜ知るかは、
１）教と、
２）正理と、
３）比喩との三つにより知るべきです。

そのうち、〔第一：〕教は、『華厳経』に「ああ、勝者の子たちよ、この三界は唯心のみ。」と説かれています。『入楞伽経』にもまた、「習気により掻き乱された心が、義〔・対象〕として現れることが生起する。義はあるわけではない。その心こそが外側の義として誤って見える。」と説かれています。

〔第二：〕正理はこの外の現れー有法（主題）。心の錯乱であると立宗する。〔なぜなら、外境として〕無いものが現れているから、〔そして〕人の角、または修習の樹のような無いものが現れているから、というのが、論証因です。同じく、有るものが現れないから、そして現れは縁の力により変わるから、そして〔繰り返しの〕数習の力により変わるし、なるから、そして〔輪廻の六趣の者たちにとっての〕六種類の現れは別異であるから、現れは〔それ自体により成立していなくて〕心の錯乱が現れるだけなのです。

〔第三：〕比喩は、〔例えば、〕夢と幻術などのようにです。

それらは、外の所取の境は成立していないことを示しています。

帰謬論証派の論証

＊1　p144-1

空と縁起

したがって、帰謬論証派にとって、「空性」とは「自性が空であること」を意味する。これは、事物が存在しないという意味ではなく、事物が、私たちが普段素朴に考えているような本来的な実体性をもっていない、という意味である。

では、もろもろの現象はどのようにして存在しているのだろうか。

『中論』の第二十四章でナーガルジュナは、現象の存在様態は、縁起とう観点からのみ理解可能であると述べている。理解の浅い段階の人々にとって「縁」とは、あらゆる現象が原因と条件に依存していることを意味するが、帰謬論証派にとってこの言葉は主に、いかなる現象も単なる概念的名称にすぎないことを意味している。

＊1　p145-14

『般若心経』の中でさまざまな現象が列挙されているのは、現象は存在するが、それ自体で存在しているのではない、ということを述べるためであり、存在は縁起という観点からのみ理解可能であることを示すためである。

カギュ派の論証

宗（論証する命題）：外の現れは心の錯乱である。

因（成立理由）：なぜなら、無いものが現れているから。
喩（宗と因の関係を明らかにする例証）：例えば、人の角や修習の樹のような無いものが現れているから。

因（成立理由）：または、有るものが現れないから。
喩（宗と因の関係を明らかにする例証）：例えば、現れは縁の力によって変わるし、数習（さくしゅう）の力によって変わるし、六種類の異なる世界があるから。

帰謬論証派の主張とカギュ派の主張の違い

参考となるサイト　http://rdor-sems.jp/index.php?　誰も知らない火事

ドルズィン・リンポチェの六波羅蜜のご法話より（2018年３月）

　私たちは智慧というものが必要なのです。智慧というのはチベット語で「シェーラプ」、日本語に直訳するならば「智慧の中でも最高なもの」と言います。
　「ラプ」というのが「最高、一番」という意味ですが、これはどういう智慧なのかと言いますと、「無我のありさまを理解する見解を持つ」ということです。これを「智慧」といいます。「すべての法、一切法というのは、無自性であり空である」ということを理解する智慧のことです。

　布施というのを、もしも空性というものを理解したうえで行うならば、それは輪廻から逃れる、解脱する原因になるわけです。ですが反対に、空性というものを理解せずに布施を行っても、輪廻から逃れることが出来ません。なぜかといいますと、「我執」というものを持ったままで行っているからです。
　布施以外の戒律にしても、忍耐にしても、それを行うことによって勿論善を積むことになる、功徳というものはあるのですけれども、それによって仏になれるかというと、それだけでは仏になることが出来ないわけです。
　その時に、「無我というものを理解する見解」がないと、仏にはなることが出来ないわけです。